



## 五 ゾンビ特別番組放映

---

一体、どうなっているんだ。中垣は現在の状況を把握しかねていた。自分の周りにはゾンビだらけだ。だが、ゾンビたちは自分たち、盆踊りに参加している人たちは攻撃をしない。スタッフの一人が、助けを求めて駐在所の警察官を呼びに行ったら、警察官もゾンビとなって帰ってきて、一緒に踊っている。推測するに、ゾンビたちの攻撃相手は盆踊りに参加しない人々なのか。その不参加組の人々も、今となっては、ゾンビに誘導されて、いや、ゾンビとなってこの盆踊り大会に参加している。この、異常というか、超常現象は、この地区だけのものなのか。

中垣は盆踊りの輪を抜け出して、テントの中の大会本部の椅子に座った。体中は汗びっしょりだ。髪の毛から、鼻の頭から、首筋から、脇の間から、へその穴から、股間から、膝の裏から、足指の間から汗がしたたる。その汗は、ダンシングヒーローを一生懸命踊ったことによる熱い汗とゾンビへの恐怖からくる冷たい汗だった。

盆踊りをするのに邪魔だったからスマホは本部テントの机の上に置いてあった。中垣はそのスマホを掴んだ。テレビを点けた。テレビ番組を見ることができるようアプリをダウンロードしていたのだ。テレビでは臨時ニュースと銘打って、アナウンサーが日ごろの活舌の良さを忘れたかのように、そう、まるで、かつ丼を食べながらニュースを読んでいるように聞き取りが悪く、しかも、見た目では、口の端から卵の黄身ではなく唾の泡を出しながら、いつ誰かに襲われるのではないかと辺りを気にしながら、焦点の合わない目を見開きながら、原稿の一部をすっ飛ばしながら、ながら読みをしていた。

「臨時ニュースです。そうです。臨時ニュースです。全国各地にゾンビが出現しています。そのゾンビは見知らぬゾンビではなく、亡くなった父母や祖父母、叔父、叔母など元親戚の人たちがゾンビになったのです。そう、死んだはずのゾンビです。いや、死んだはずの人たちです。そうした祖先たちが、クリスマスプレゼントでもないのに、いや、お正月のお年玉をもらうわけでもないのに、いや違った、お年玉はそうした人かもらったんですね、そのお年玉をあげた子孫の元に現れているようです。

何故、そうしたゾンビが現れたのかは不明です。あの世でお金が必要になったのか、死んでからお金を渡したことがもったいなく思えて、お年玉を取り戻しにきたのでしょうか。これはあくまでも推測にしか過ぎません。そして、その元親戚のゾンビに襲われた人々は、同じようにゾンビとなり、自分の血筋の親戚を求めて徘徊しています。血が血を求めているのです。まさに、血統、いや決闘するしかありません。皆さん、どうぞ、お気をつけてください」

台風が超高速で過ぎ去るような勢いで、しかも、支離滅裂な原稿を読み終えた男性アナウンサー

。その前に、画面を横切るように何者かが通った。その何者かの背中だけが画面に映し出される。

「今、本番中だぞ」

「そこをどけ」

「一体、誰だ」

慌てるスタッフの怒声がアナウンサーの胸に着けている集音マイク越しに聞こえてくる。

「じ、じいちゃん」

先ほどのアナウンサーの驚いたような声が聞こえた。

その後すぐに「わあああ」と首筋を噛まれたような絶叫の声。

画面を覆い隠していた背中が消えた。カメラはスタジオ内を映し出している。そこには、数十体のゾンビが、アナウンサーを始め、カメラマン、プロデューサー、ディレクター、ADたちスタッフにそれぞれ襲い掛かっていた。

「ばあちゃん、やめてくれ。肩を揉まなかったことはあやまるよ」

「おじさん、どうしたんだよ。昔、一緒に酒を飲んだ仲じゃないか」

「お婆さん、あたしを忘れたの。姪の詩織よ。お婆さんは死んでいたから知らないかもしれないけれど、お婆さんの葬式にはちゃんと参列したし、香典もお供えしたわよ」

スタッフたちは思い着く限りの言葉を叫び、命乞いしながら、狭いスタジオ内を逃げ回っていた。その様子をカメラはドキュメンタリーのように容赦なく映し出している。それは、カメラマンがいなくなった制御不能のカメラが止まることなく現場の映像を映しているだけだったのだが。その後、そのドキュメンタリーは、襲ったゾンビとそのゾンビに襲われて新たにゾンビとなったゾンビが手をつなぎながら、仲良くフロアーから出て行く姿で終わりを告げた。

「これは、すごい」

中垣はブルーライトに照らされながら、スマホの画面に食い入るように見つめている。だが、

すぐにスマホの画面を指でスライドさせる。別のテレビ局の画面が映った。ここでもニュースが放映されていた。

「ここは、上空です。私はヘリコプターに乗って、空から取材しています。街中に、ゾンビが溢れかえっています。そのゾンビたちが、今、どこへともなく移動しています。いや、東西南北、八方に分かれて分散しています。これでは、どこに隠れてもゾンビに見つかってしまいます。まさに、私たち人間にとっては八方塞がりです。ゾンビは、単独行の者もいれば、家族や親戚などか、単なる知人か、出身が同じものか、とにかく数十対の集団となって、列をなして行進しているものもいます。まさに、盆や正月の帰省ラッシュのようです。一体、彼らはどこへ向かうとしているのでしょうか」

アナウンサーの顔がアップとなる。その向こう側には、ヘリコプターの操縦士の背中が写っている。操縦士と副操縦士が振り返った。その顔はゾンビだった。副操縦士のゾンビがアナウンサーとカメラマンに飛び掛かる。

「わあ」

「あわ」

アナウンサーとカメラマンの断末魔の二つの声とカメラがガタンと落ちる音がした。画面はヘリコプターのシートを映している。ヘリコプターは老朽化しているのか、それとも、修繕費用をケチっているのか、シートの一部に破れた箇所を隠すように黄土色の布製のガムテープが張ってあった。それが、妙にリアルに見える。しばらくすると、カメラが誰かの手によって持ち上げられた。

カメラにはゾンビと化したアナウンサーの顔が映った。アナウンサーはゾンビ語で何かをしゃべりながら、指で遥か彼方の先を示している。だが、カメラマンはそれを遮るようにアナウンサーゾンビとは反対方向を指さしている。それに割って入り、副操縦士がまた別の方向を指さした。操縦士が首を五百四十度回転させ、振り返った。うわわわわ。ゾンビ語で何事かを叫び、ヘリコプターは地面に向かって猛スピードで落ちて行った。カメラは何事も変わらない日常の青い空と白い雲を映し出していた。

「すごい」

中垣はテレビ画面を観て、あまりのすごさに、先ほどとは異なり、これは、という言葉が先に出

なかった。とにかく、何がすごいのかわからないけれど、すごいという語彙しか出てこなかったのだ。すごいとは、いい意味でも悪い意味でもすごいのである。

中垣はスマホをラジオに切り替えた。スマホでラジオも聞ける。便利な世の中だ。だが、今は、悠長に、そんなことに感心している場合ではない。ラジオでもゾンビが大都市から地方都市、農村、漁村までに出現し、次々と人を襲っていると報道していた。そのニュースの中でも、お墓参りなのか、故郷に帰ろうとしているのか、とにかく帰省客には襲ってはいないとの情報だった。

これは、この町でも一緒だった。ゾンビたちは盆踊りに積極的に参加してくれ、そこに参加している人には決して、噛みついたりはしていない。それどころか、一緒に手を取り合って踊るくらいだ。

ただし、参加者にとってはあまり気持ちがよいものではないのか、おっかなびっくりで、肘を曲げ、いつでも手を引っ込めるような姿勢だ。いわゆる腰が引けている状態だ。それでも、手をつなぐことで、ゾンビに襲われないのだったら、自分がゾンビにならないのだったら、お安い御用とばかりに手を繋いでいるのだ。ゾンビになるか、盆踊りをするか。これは決して、究極の選択ではない。誰だって、ゾンビになるくらいだったら、喜んで手を繋ぐ方を、盆踊りに参加する方を選ぶだろう。

大都会などに住む人々も同じだ。ゾンビになるくらいだったら、里帰りをした方がまだ。それに、盆踊りに参加しなかったり、里帰りをしなくても、ゾンビに襲われてゾンビと化するのだ。ゾンビとなれば、盆踊りに参加したり、里帰りをすることになる。盆踊りをする阿呆に、ゾンビになる阿呆。どうせ、阿呆なら、里帰りせな、盆踊りせな、そんなものだ。

だが、一昨日から始まった盆踊りは今日で三日目だ。さすがに疲れがたまってきた。中垣はスマホをカメラに切り替え、自分撮り用に反転させる。これで、スマホは、カメラは、鏡になる。テクマクマヤコン、テクマクマヤコン、自分の顔を映せ。ほんとに便利になった世の中だ。スマホが一つあれば、ほとんどのことができるのだ。だが、今は、そんなことに感心している場合ではない。中垣は現状を確認するかのように自分の顔を凝視した。目の周りは隈ができている。頬も張りがなくなり、生気がなくなっている。ゾンビとあまりにも同じ時間を過ごしてきたので、ゾンビが人間化するのではなく、人間の方がゾンビ化してきているのだった。ひよっとしたら、人間として残された時間はあとわずかなのかもしれない。

全国でも、秋田県の西馬音内盆踊りや富山県のおわら風の盆や岐阜県の郡上八幡盆踊りなど、有名な盆踊りは、一晩中、踊りを続けるらしいが、中垣の地区の盆踊りも時間の長さだけは有名盆踊り大会に匹敵するようなスケジュールに突入した。

踊りをやめようにも、ゾンビは相変わらず踊り続けているし、その数も増している。また、ゾンビになりたくない町の人々と、大都会から帰省した人々がお墓参りを済ませた後、盆踊りに続々と参加しているので、一向にやめようという雰囲気はない。だけど、中垣たちは、初日からの参加組のため、日ごろの運動不足の影響もあるのか、足腰が立たなくなってきた。椅子に座ったり、新聞紙やダンボール用紙を地面に敷いて寝ころんだりしている。

「いつまで続くんだろうか」

知らない間に、隣に自治会長さんが座っていた。その自治会長さんが誰に聞こえるともなく呟いた。その声にはもうやめて欲しい、勘弁して欲しいという感情が込められていた。

「盆踊りに多くの人やゾンビたちが参加して賑やかになるのはいいけれど、終わりが見えないのも疲れますねえ」

木本さんが自治会長さんの隣に座った。

「そうですね。もう、そろそろにして欲しいですね」

中垣は木本さんの向かい側に座った。その声は小さくなる。だが、主催者たちの意に反して、盆踊りはますます高まり、頂点に達しようとしていた。

「テレビを御覧の皆さん。おはようございます。司会の、早起きは三文の徳太郎です。さて、今朝は、この国中がゾンビ化している理由を、専門家の方々にお伺いし、私たち人間がこれからどうしていくべきかを議論したいと考えています。それでは、ゲストの方々を御紹介します。

まず、トップバッターは、心霊研究家の恐山恐子（おそれざんきょうこ）さんです。恐山さんは、現在も、現役の巫女さんとして活躍しており、先祖の霊を度々召喚しております。この国の召喚オババ、いや、失礼、セクハラ発言は訂正して、召喚ガールの第一人者です」

テレビ画面には、青いスーツに赤いネクタイ、黄色いワイシャツの三原則のいで立ちで、髪は七三に分け、眼鏡は眼光が鋭く見えるよう細身で吊り上がっているなど、まさに、ザ・司会者と見えるアナウンサーが白いカウンターの左端に座っていた。そのカウンターの正面には、女性が二人、男性が二人が、それぞれ、自らの職業や思想を体現したような服装を身に着けていた。だが、コの字型や口の字型のように、出演者が向き合う形ではない。みんな正面を向いている。

映画「家族ゲーム」の食事の風景のようで、これでは、互いに顔を見合わせて議論はできないように思えた。

司会者が恐山と紹介した女性は、全身白装束で、手には数珠を握っていた。体は小山のような体形で、どこからが首で、どこからが胸で、どこからがお腹で、どこからかが下半身なのか、一瞥ただけではわからなかった。いわゆる、境目のない体、くびれを失った体と言った方がよいのかもしれない。ただし、体つきは二次元で言えば二等辺三角形、三次元ならば冰山と相似していた。そして、顔は一見、青白く見えるものの、それはドーランか何かを塗って誤魔化しているようで、よく見ると、下地の健康そうな赤ら顔が浮かんで見えた。

「御紹介いただきました恐山です。祟りじゃ、祟りじゃ、先祖をないがしろにした祟りじゃ」

と、さっきまで、手相を見てあげましょうか、無料ですよ、と、同じ番組の出演者と談笑していたのに、カメラが向けられたとたん、急に髪を振り乱し、目が血走ったまま、怒涛のように叫ぶ恐山恐子。まさに恐ろしい有様だ。

「恐山さんは、既に、先祖の霊を憑依させているようですね。後で、ゆっくりとこのゾンビ現象を尋ねてみましょう。それでは、次に、京東大学の教授、現実直視男さんです。現実教授よろしくお願いします」

現実教授は、フチなし眼鏡をかけ、顔や体を画面に向かってやや斜に構えたまま、右ひざを左ひざに乗せて足を組んでいる。足が疲れたのか、時々、足を組み替えている。

「祟りだなんて、そんな非科学的なことがこの科学の時代にあるなんて信じられませんよ。ゾンビ？誰かが着ぐるみでも着ているのでしょうか。死体が生き返るなんて、ある訳ないでしょう。それは、映画や小説の世界ですよ。動かないから死体なんですよ。胴体が動いていたら動体でしょう。そうそう、ゾンビ映画のゾンビのメーキャップは本当に素晴らしいですよ。確か、日本人でアカデミー賞か何かの賞を貰った人がいたでしょう。こういう細かな手作業は日本人には向いているんですよ。もっと、若い人を中心に、夢を持ってどんどんと世界に進出しなくっちゃ」

現実先生は、現実にも目を背け、夢を語り始めた。それを修正するため、司会者は現実先生から話を逸らす。

「それでは、今、お話のありましたゾンビ映画が大好きなアイドルの河合可愛子さんです」

上半身はセーラー服で、下半身はピンクのフリルの付いたスカートを履いている。顔は目、鼻

、耳、口は筆で線を描いたようなこけし顔で、小首をかしげ、唇を半開きにしたまま小指を咥えている。

「あたし、ゾンビが大好きなんです。映画館に行かなくても、こんなにたくさんのゾンビに会えるなんて、あたし最高です。できたら、サインを貰いたいです。写真も撮りたいし、動画も撮りたいなあ。フェイスブックやインスタグラムにも上げたいなあ。ぴちぴち」

「なんですか。その、最後のコメント、ぴちぴちは？」

司会者は台本を見ながら尋ねる。

「あたしの体がぴちぴちだということを表現した擬態語です。いや、擬音語かなあ」

河合可愛子は小首を更に傾げた。頭が肩に引っ付きそうだ。まだ、若いのに肩が凝るのか。アイドルは常に人に見られているから、体の緊張度も違うのであろう。それにしても、その姿は、まさにゾンビが首を傾げた状態とそっくりである。本当に、彼女はサービス精神が旺盛なアイドルなのである。

「こんなこともできるんですよ」と言うなり、彼女はスカートの中に頭を突っ込み、反対側から顔を出した。天の橋立の股覗きを通り越した、ああ、股越えの体勢だ。それこそ、まさに、ゾンビ近づき体形だ。

「あたし、あのゾンビの人間離れした体形に憧れて、ヨガを始めたんです。その名も「ゾンビヨガ」。普段、ちじこまった体をあたしと一緒に伸ばしませんか。本も書いたんです。写真付きです。題名は「あなたもゾンビになれる。究極のゾンビヨガ。これで、ゾンビのように長生きできます」です。みなさん、是非、買ってください。一冊千円です。先着一万名様にはあたしのサインがついています。出版社はゾンビ出版です。よろしくお願いします」

ゾンビの話題から自分のゾンビヨガの本の宣伝を始めた可愛可愛子。顔は置いておいて、しぐさが可愛い割には抜け目がない。

「はい。ありがとうございます。詳しい話はあとで」と司会者は自分勝手な出演者に頭がブチ切れそうなのをなんとか我慢して血管をつなぎ、だらだらとまだまだ続きそうな彼女の宣伝文句を途中でぶち切ると、次の人に話を振った。

「それでは、埋葬方法や宗教などに詳しい文化人類学者の、郷土愛夫先生です。先生、よろしくお願いします」

「郷土です。今、社会はバラバラになっています。家族も、会社も、隣近所も、スポーツ団体も、みんな、バラバラです。それを警鐘するため、啓発するために現れたのがゾンビなのです。でも、牛肉や豚肉は一頭売りではなく、バラ売りはありがたいですねえ。それも、庶民の味方のバラ肉は大変美味しいですよ。だから、私は、何もかもバラバラが悪いとは言っていません。学者は、常に、自分自身の考えにさえも疑問を持っているものなんですよ」

口から泡を飛ばしながら、熱弁を語り出した郷土愛夫。

「まあまあ、皆さんの御意見は後でゆっくりとお伺いします」

と、司会者は口ではゆったりとしゃべりながらも、これから番組が台本通りにすんなりといきそうにないことを台本を片手に見ながら確信していた。